

## 伝統産業におけるデザイン研究 2

その活性化に向けて ——現状と方策——

黒川 威人

### 1 はじめに

本研究は、地方における伝統産業の意義に着目し、過去から現在に至る伝統産業（ここでは特に工芸産業を指す）の流れをインダストリアルデザイン（以下ID）の視点から見直し光を当てようとするものである。

さて、地方の時代といわれ、地域の活性化が叫ばれて久しいが、地域特有の産業である伝統産業はその大半が衰退の一途をたどっている。

本研究は前稿で述べたように、デザイン研究者の目で地方の伝統産業を読み直し、これによって伝統産業の変遷をIDの流れとして明らかにし、ID史のためのデータベースの一端とするとともに、伝統産業界の活性化の一助となることを目指している。

前回は衰退の最も著しい業種として加賀象嵌を取り上げ、簡単な歴史の変遷をたどるとともに、金沢美大美術工芸研究所において行なったいくつかの試作研究の結果、明らかになった技術上の様々な問題点、および今後の産業としての展開の可能性について考察を行なった。

本稿は、昭和60年11月金沢において開催された北陸伝統産業学会の第1回研究発表大会におけるシンポジウムから得られた知見を中心に、加賀象嵌専従者他関係者からの意見聴取をもとに、これまでの加賀象嵌の研究成果を踏まえながら北陸、特に金沢を中心とする石川県の伝統産業全体のID的見地からの諸問題を広く見渡したものである。

### 2 北陸伝統産業学会

北陸三県の大学、工業試験場を中心とする伝統産業関係の研究者、作家、デザイナー等を集めて結成された学際的な集まりで、工芸産業を

始めとする伝統産業の振興に寄与することを目的に昭和60年5月に発足した。会員数は現在石川を中心に約130名であるが、3名の人間国宝を始め工学者、美学者、歴史学者と多彩であり、業種も陶芸、漆芸、象嵌、銅器、木工、和紙、染色、織物、打刃物、刀剣、ガラス、建築その他と多岐に渡っている。

同年11月第1回の研究発表大会を金沢美大において開催し『加賀象嵌をルーツとする製品開発研究』（筆者による）から『CGシステム利用によるデザイン開発』まで6本の研究発表と『伝統産業とは何か — その活性化に向けて』をテーマにシンポジウムを行なうなどしている。<sup>(1)</sup>

### 3 研究方法

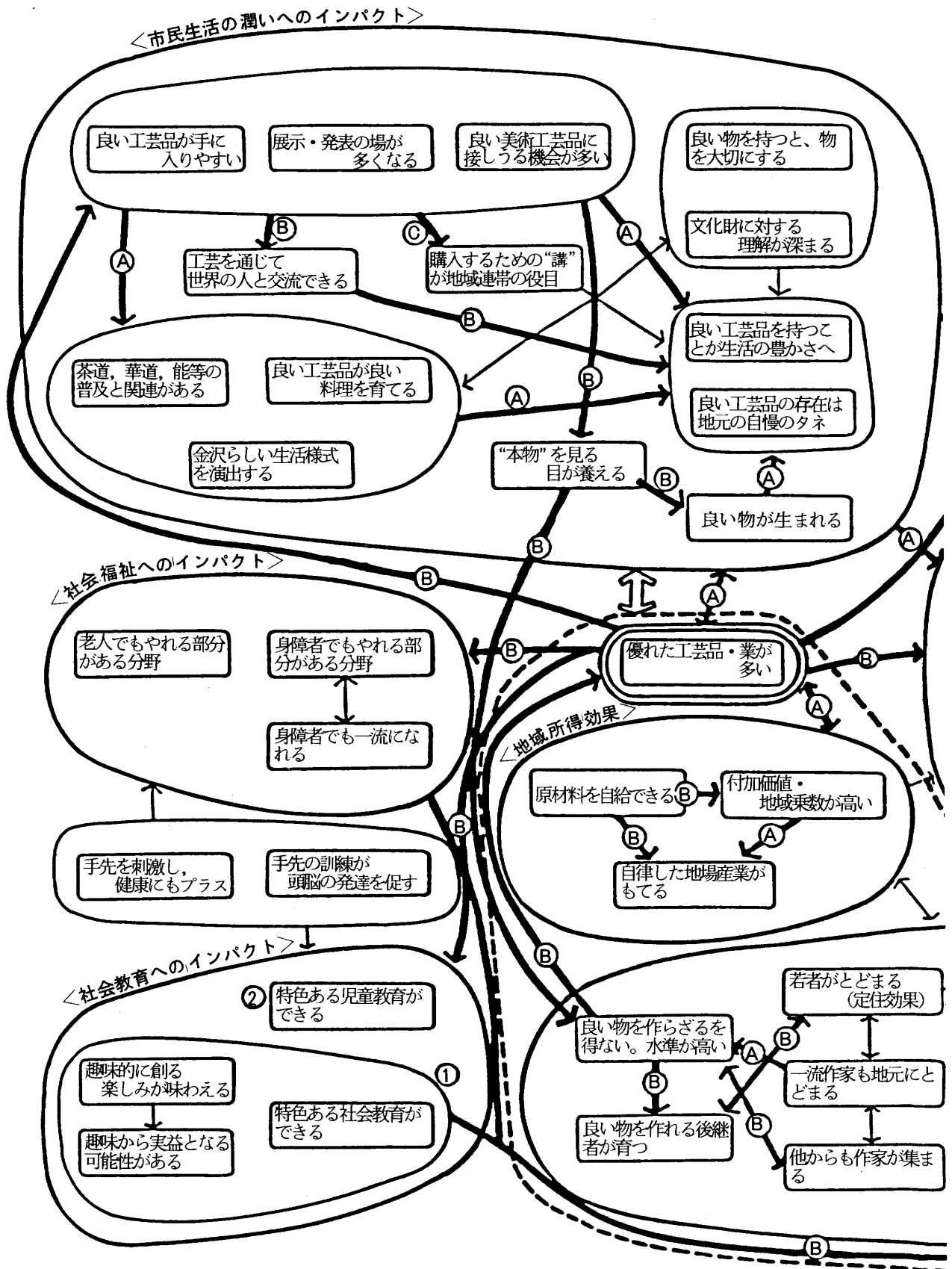
上記シンポジウムにおいて得られた知見を中心に、主たる論点と思われる事象をカードに抜き出し、KJ法の要領でマップ化した。続いてそのマップを読み取り文章化することによって浮き彫りにされた諸問題に関し、考察をおこなった。なお、シンポジウムのパネリストは表1の通り歴史学者、工学者、陶芸作家、デザイン教育者、デザイン行政、の5人で前3氏は石川県、後2人が順に富山県、福井県である。なおモデレーターはデザイン教育者が務めた。

この結果、北陸三県に共通するほとんどの問題が広く討議されたが、メンバーの専門域の関係で抜け落ちた分野があり、マップ作成に当たっては一部を筆者のこれまでの研究成果から得られたデータなどの補足資料によった。

### 4 伝統工芸と街づくり

本研究よりやや早く『伝統工芸と街づくり・金沢の試み』なる研究が水野一郎氏（金沢工業

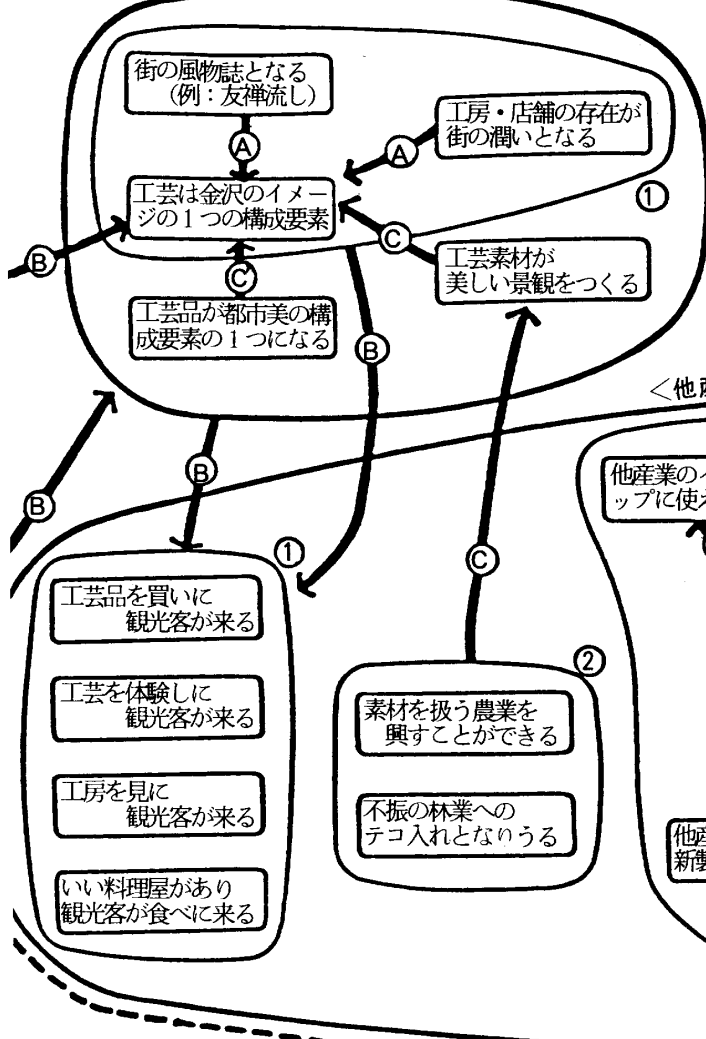
図-1 伝統工芸業が地域社会に与えるインパクトの構造



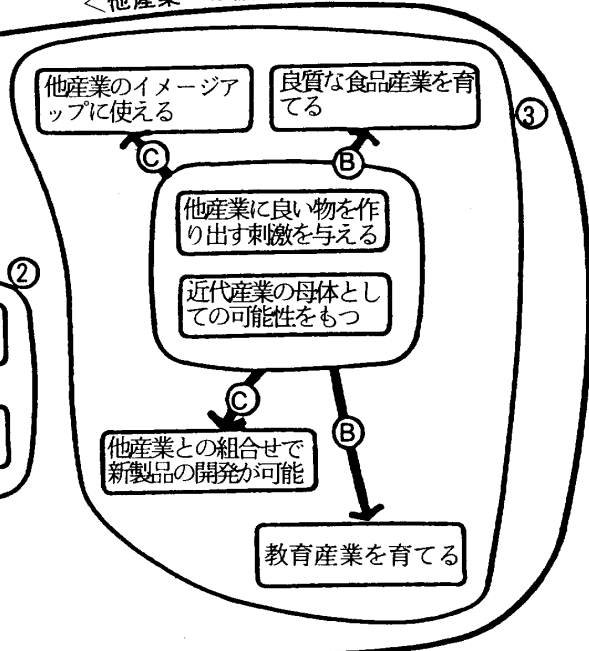
〈成立状況の評価〉

- (A)— 金沢でかなり充実した関係が成立している
- (B)— 一部に関係が成立しているが、充実させるべき課題が多い
- (C)— あまり因果関係が成立していない
- (—C—) 金沢以外では成立している事例がある

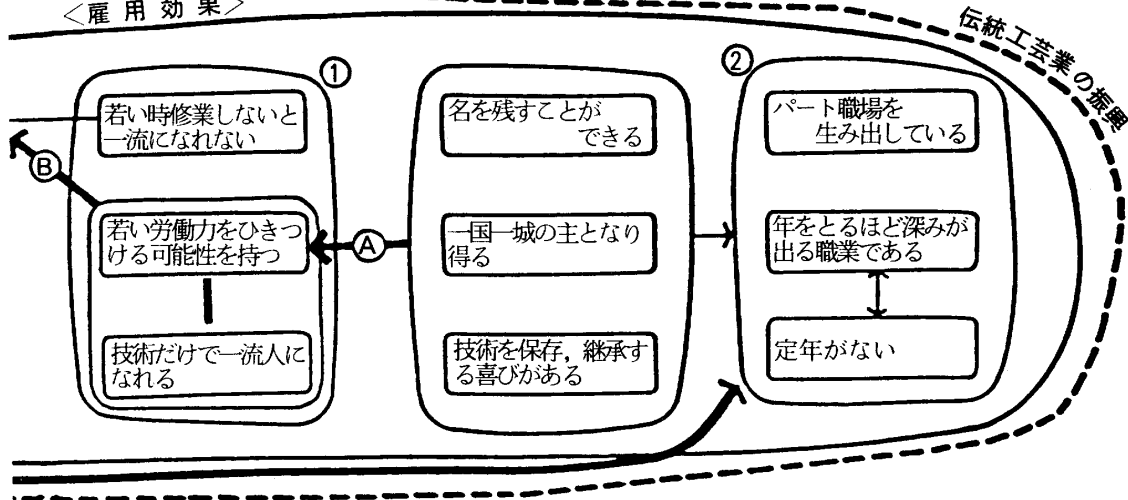
〈都市形成、景観に与えるインパクト〉



〈他産業への波及効果〉



〈雇用効果〉



大学教授、建築学)の指導によって行われ、昭和55年に北国文化事業団より発表されている。これは国の総合研究開発機構(NIRA)の助成を受けて遂行されたもので副題に一伝統工芸が地域社会に与える影響の分析とそれをテコにした個性豊かな街づくりの提案—とあるように建築家グループによる金沢の街づくりの一環として研究されたものである。

図1はその研究の中で紹介されている『伝統工芸業が地域社会に与えるインパクトの構造』と題するマップであるが伝統産業に共通する一般的な問題と解を多く含んでいると思われるので、これによって若干の解説を試みたい。

#### 4-1 伝統産業は市民生活に潤いを与える。

伝統産業が豊かに栄えていることは、例えば展示会や発表会の形で常に良い作品に接する機会が多いことであり、優れた工芸品などが手に入りやすいことを意味しているが、それは一方で、茶道や華道、能楽等の伝統的芸事の普及にとっても大いに関係がある。そればかりか良い器や良い道具の存在が良い料理を育てるとも考えられ、こうしたことが相まって金沢らしさが演出されているといえよう。

さらに連鎖の効果としては、良い物を持つことによって物を大切にすることを覚え、ひいては文化財に対する理解が深まることが期待できるのである。

このように工芸品産業を持つことは郷土自慢のタネであり、良いものを自ら所有し使うことが生活の豊かさへつながると思われるし、それはまた『本物』を見る目が養えることにつながり、やがて良いものが生まれることへと連鎖していくであろう。

工芸を通じて世界の人と交流することなどは金沢では北欧とのデザイン交流展などで既に経験済みである。

#### 4-2 他産業への波及効果

優れた伝統産業の存在は他産業に対し良い物を作り出す上で刺激を与えずにはおかない。それは常に近代産業の母体としての可能性をはらんでいるからである。直接的には他の産業技術との組合せで即新製品の開発が可能であるし、

なによりも地域の風土に密着していることは良質な食品産業や教育産業を育てることにつながる可能性を秘めているのである。

今日、現実に他産業のイメージアップに役立っているものとして繊維産業における加賀友禅の存在など例はいくつか上げられよう。

より直接的には工芸用の素材を扱う農業や林業を起こすことは可能のはずで(もともとはそれが根拠にあったのだが)不振の林業などは間伐材の多角利用や和紙の原料である楮の栽培などでかなりのテコ入れとなりうるのではないだろうか。

現在もっとも波及効果をもたらしていると思われるのは観光業に対してであろう。金沢は日本でも有数の観光客の多いところであるが、これには伝統産業の存在が大きく貢献していると思われる。つまり観光コースの中には工房の見学や産地での買物が大きな比重で組み込まれているし、最近では自ら体験することのできる工房も増えているのである。また良い器が暗示する良い料理(屋)の存在は、味覚を楽しむための観光客の集客にも役立っているのである。

#### 4-3 雇用効果

伝統産業は一般には後継者不足の問題が常に話題にされるが実際にはどうであろうか。

有名工房や輪島漆芸研究所には、近年は東京など他府県からも弟子入りや入所を希望するものが少なくないといわれるが、逆に若い労働力をひきつける可能性を持っているという見方ができるのではあるまいか。その背景にはひっそくした管理社会を嫌い、技術だけで一流人になれる、一国一城のあるじになれる、あるいは名を残すことができるといった現代社会が見失った夢を伝統産業に求めている若者達の姿がある。そうではなくても、少なくとも技術を保存、継承しているのだといった誇りと喜びにつながる職業であることはもっと協調されてしかるべきである。ただし、そのためには若い時修業しないと一流にはなれないといった前提があるが、これは小さい頃よりそれを目の当りにして育った地元出身者には絶対有利な条件であり、時には若者がとどまるための理由となっている。

一方産地としての水準が高いことは一流作家も地元にとどまることをうながし、そのことが逆に他所からも作家が集まってくるということにもつながっているが、その結果は良いものを作らざるを得ない環境の形成を促し、良いものを作れる後継者の発生へと連なるのである。特筆すべきことは、年をとるほど深みが出る職業であり、定年がないということ、あるいはフル勤務でなくとも、近所の主婦らがパートタイマーとして何時でも参加できることの意味も大きいといえる。

#### 4-4 地域所得効果

本来伝統産業は地場産業であり、その土地で原材料を自給できるのがメリットであった。この原点にもどすことが健全な伝統産業を育成するには欠かせない条件といえる。即ち、これによって付加価値が高まり地域への所得効果である地域乗数が高まるのであるし、自律した地場産業ともなり得るのである。

#### 4-5 社会福祉へのインパクト

前々項でも触れたように伝統産業は地域と密着しているために社会福祉的な効果を持つことが特徴でもある。前述のパートの例に見るように体力の衰えた老人や心身障害者でも充分やれる分野があり、さらに心身障害者が一流になれる可能性も十分に持っているのである（既にいくつもの実例がある）。なお、一般に、こうした仕事について手先を動かすことは手先を刺激し頭脳の発達をうながすとともに健康の増進にもつながると考えられるのである。

#### 4-6 社会教育へのインパクト。

前項で述べたように手先を動かすことは頭脳の発達をうながすし、地域社会の理解には打ってつけであることから、これを教育に取り込むことによって特色ある児童教育に寄与できるであろう。また主婦や老人などの趣味の講座として取り入れることによって特色ある社会教育ができるであろう。前項で述べた伝統産業の特性から趣味が転じて実益となる可能性さえ十分に考えられるのである。

#### 4-7 都市形成、景観に与えるインパクト

伝統産業の存在は例えば友禅流しのように街

の風物誌となり得るし、工房や店舗の存在そのものが街の潤いとなっている。伝統産業は金沢のイメージの1つの重要な構成要素になっているといえよう。さらに公園の植栽などにも例えば楮や三桠（和紙原料）漆など工芸素材を取り込むことによって、より美しい景観の創出に役立たせることが考えられて良いし、九谷焼のストリートファニチュアで街を色どるなど伝統工芸が都市美の構成要素の1つとなることは充分に考えられるのである。

### 5 北陸における伝統産業活性化の方策

3章で述べたように、これまでの研究の結果図2のようなマップが得られたので以下に解説ならびに考察を行ない結論としたい。

なお、前章のマップは、特色ある街づくりのために積極的に金沢の伝統産業の良さを引き出す観点で作成してあり、これによるデメリットあるいは伝統産業が抱える問題点についてはあえて明確に出していない。以下のマップではこの点が焦点となっている。

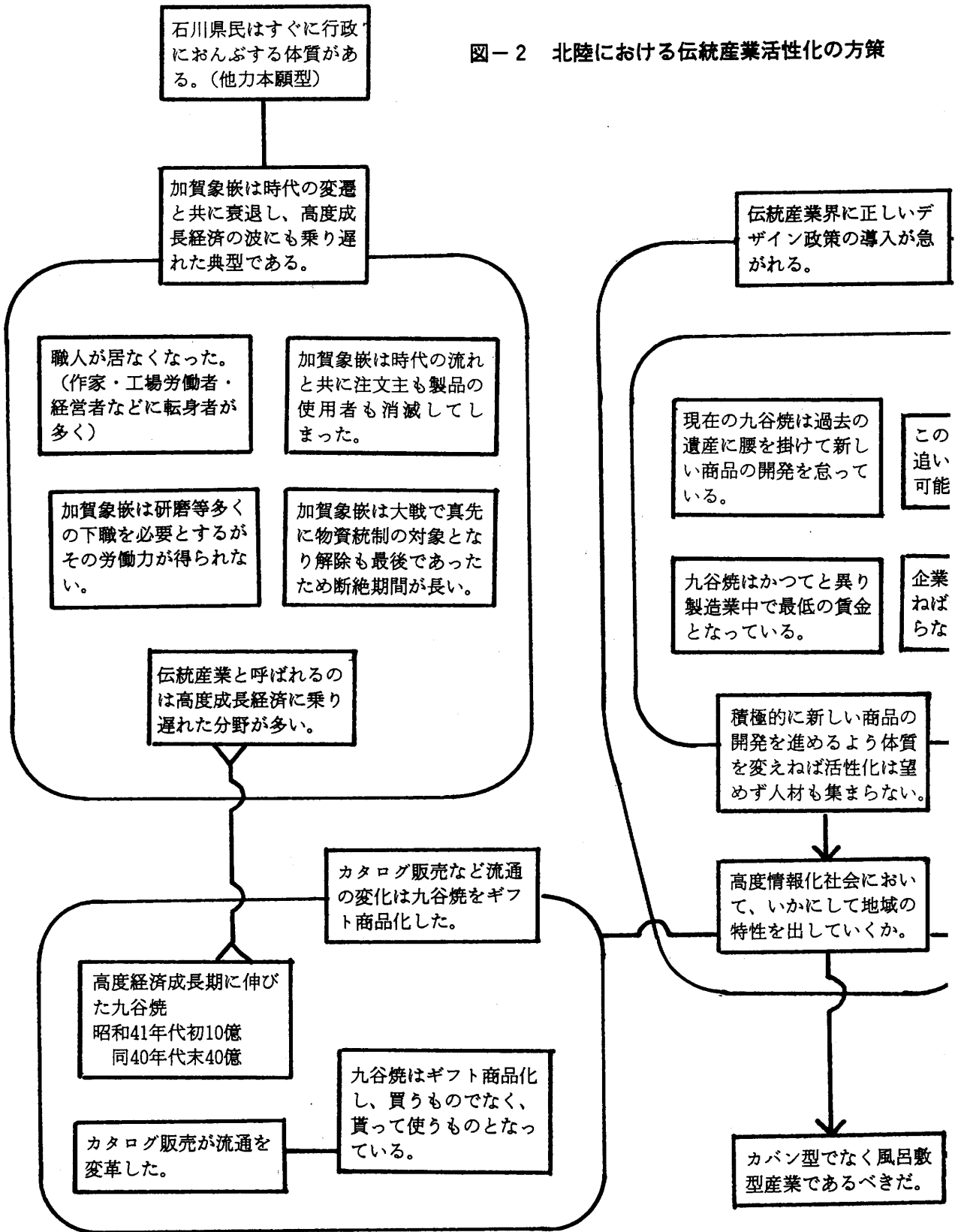
#### 5-1 北陸の伝統産業の現状

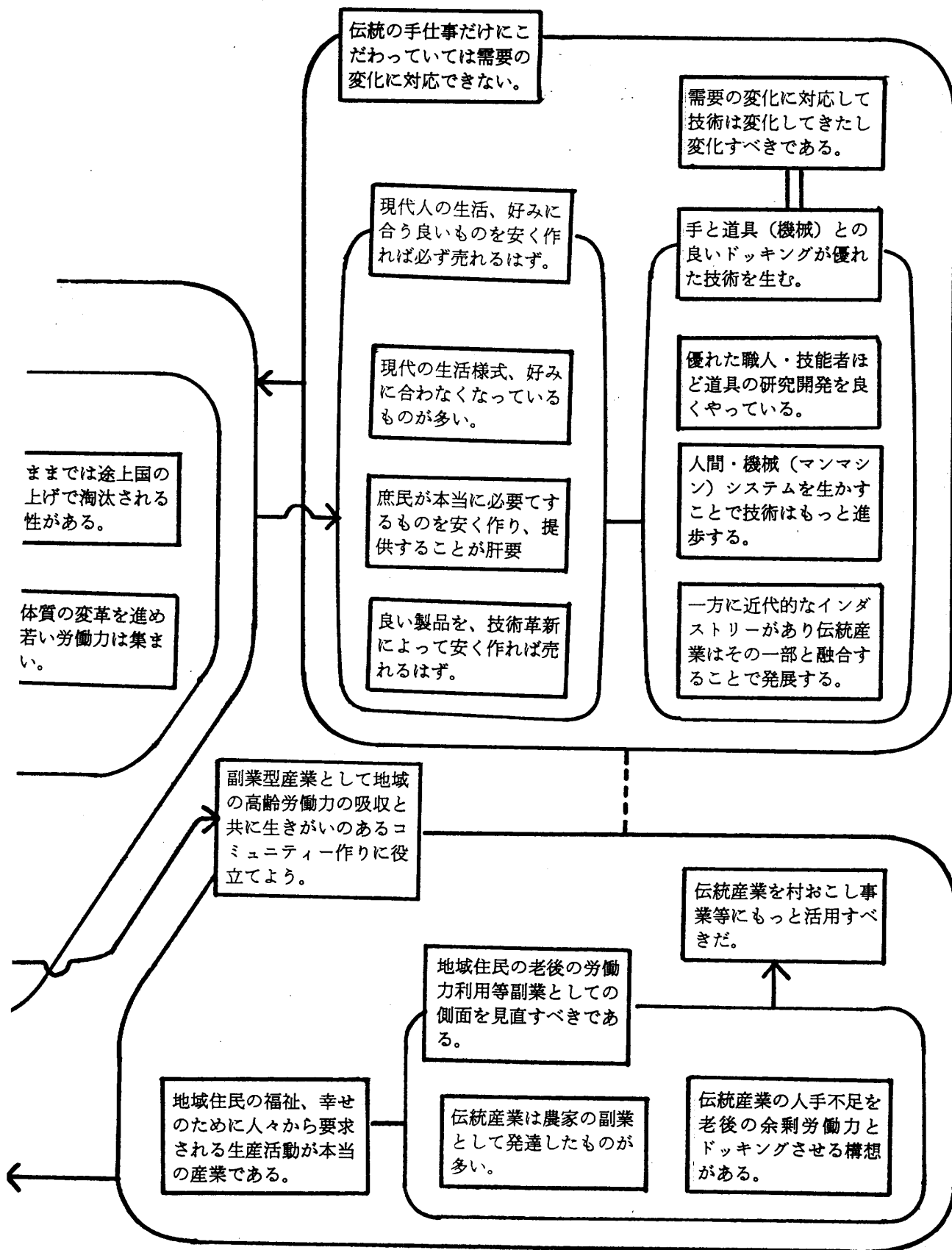
北陸には数多くの伝統産業が存在するにもかかわらず現状では産業としての経済効果は小さい。例えば京都では製造出荷額に占める伝統産業の割合が10%を越えているが石川県では5%以下でしかないことが端的に物語っている。

さらに石川県の場合は歴史的に伝統産業の多くが藩主の直接の差配によって推進されてきたためか、役所の指示がないと何事も進まない傾向がある。繊維産業のごとき業を始めるに当っては補助金、さらに、機械の廃棄に当たっても補償金をあてにする等が典型である。即ち、自ら現状を打開しようとの気力、意志に欠けるうらみがある。

例えば加賀象嵌は武士の装剣など武家社会における需要が主であったため、明治維新による武家社会の崩壊とともに職を失ったのであったが、明治に入ってから、初代金沢市長を務めた長谷川準也による銅器会社等によってかろうじて活路を得たのであった。それも産物輸出によって外貨を得ようとした、時の政府の殖産興

図-2 北陸における伝統産業活性化の方策





業政策に支えられたものであった。

今日、伝統産業を昔ながらに続けているのは、むしろ高度成長経済に乗り遅れた分野の業種と見る見方もあるのである。

一方、九谷焼のように需要が高く大産地を形成していたような業界も、作り手よりも売り手が次第に増加し両者の数が相拮抗するほどになると収益は減少し伸び悩むようになってきた。さらにカタログ販売など流通の変革は商品をギフト商品化し業界を一変させずにはおこなったが、過当競争と低収益の悪循環は一向に改善されるきざしが無い。このことは明治時代の農家の副業であった時代のほうが、平均的な製造業の給料よりもはるかに高かったのに比べ今日ではむしろ最低レベルとなっている点でも明らかであり、人材の集まらない原因ともなっているのである。

#### 5-2 いかにして需要の変化に対応するか。

昔ながらの物を昔ながらの技法で作ってればそれで生活が成り立つのなら苦勞はない。業種によっては、いかに絶滅を防ぐかといった瀬戸際にまで来てしまっているのが現状であろう。加賀象嵌にしる藩政初期の優れた作品は豊かな財力を背景とした余裕の中であつたればこそその産物と見ることも出来るように、問題は、明治以降封建社会の崩壊とともになしくず的に消滅していった伝統的な徒弟制に象徴される低廉な労働力の消滅であると考えられる。今日研ぎ作業など下仕事をほとんど無償に近い労働力で得られるなどという状況は皆無に近い。こうした社会状況の変化を考えると、かつての弟子達の仕事であった作業は、これを機械に置き代えないかぎり生産性は維持できないのである。このように昔ながらの技法のみに固執するかぎり新しいデザインを生み出すための時間はおろか、弟子の分の仕事までを一人でこなす事となりあきらかに退歩でしかない。藩政時代も後半になると財力は底をつき苦しい藩財政であつたと思われるが、先代からのデザインを踏襲するだけで何ら新しいデザインが見られないのは既にこのような背景があつたのではあるまいか。このように考えると、機械化の必然性は

世の流れであり避けることはできないが、伝統産業の特質を考えると昔おのずから限界がある。即ち、手仕事の良さと機械の特性をうまくドッキングさせることにより、手のみでも機械のみでも無し得ないことをこそ目指すべきなのではあるまいか。精密加工学の分野では既にそうした形でのマン・マシーン・リレーションが考えられているようだが、学ぶべき考えであると思う。振りかへって技術の歴史を見てみると、不変のように思われている伝統産業の技法も時代の流れとともに変遷発達していることに気付かされる。例えば加賀象嵌の技法も世にいわれるように桃山時代の技法作風を墨守したのではなく、桑村彫り中興の祖といわれる桑村源左衛門<sup>(2)</sup>の例に見るように時代の要求をたくみに読み取り時代とともに変化しているのである。九谷もまたひたすら古九谷の作風ばかりを追い求めたのではなかつた事は九谷庄三のあざやかな作例があるように時代に即応した技法と作風が生まれてはじめて業界が繁栄したのである。

このように考えると現在の伝統産業界が真に時代の要請に応じて工夫、努力を重ねているかどうかは疑問視せざるを得ないのである。

現代人の生活、好みに合う良いものを作りリーズナブルな価格で販売ルートにのせるならば、必ず売れるはずである。そのためには良いデザインの企画とともに手と機械との良いドッキングが図られねばならないだろう。

#### 5-4 正しいデザイン政策の導入を

インダストリアルデザインはこれまで大企業にばかり奉仕して来た感があるが、地方の伝統産業にもっと力を注ぐ必要がある。片やハイテクノロジーを駆使した生活用品があり、一方に手仕事の良さをたたえた伝統産業による産物があることは人間の生活をそれだけ豊かにする訳であるし、こうした生活用品全体のバリエーションのミックス自体がインダストリアルデザイナーによって考えられる時代となって来ていることは注目されて良い。

それにしても伝統産業の業界自体が古いからを守るだけでなく積極的に新しい商品の開発を進めるよう体質改善をはからねば活性化は望め



ないだろう。そして、若者にも将来に希望を持って働ける良質な環境を作らねば優秀な人材は集まらない。

また、高度情報化社会にあっては否応なしに地域特性が薄れ、産品自体均質化しがちなものである。外の産地にはないこの産地の特徴は何なのか、あるいは特徴をどうつけるのかといった、デザインプロモーションの必要性も高くなっている。手仕事であるが故により高度の企業経営が求められるが、近代工業の企業スタイルの形だけを真似る愚は避けたいものである。キャパシティが一定の、カバン型でなくあくまでも融通の利く風呂敷型産業であるべきであろう。

#### 5-5 伝統産業を地域社会作りに生かす

伝統産業だけで地域振興を図ることは無理であり、むしろ副業型産業としての側面を活すべきであろう。和紙作りにしろ九谷焼きにしろもともと農家の副業として発達したものであったことに思いをいたすべきである。今日でいえば定年後の労働力あるいは主婦のパートとしての労働力の活用がこれに当たるが、副業型であることは無理がないのである。また、地域に密着した潜在的な労働力の掘り起しは、潜在的な産業の掘り起しにつながり、地域を活性化させるだろう。このように考えるといわゆる村起し運動等にはもっと活用されて良い。

住民の住んでいる地域に最も合った産業とは地域住民の、幸せのために人々から要求されるものであるべきであり、それこそが真の意味の産業である。以上のような観点に立つ時、伝統産業の存在はそうした条件の多くを満たすものであるといえるだろう。

以上、伝統産業活性化の方策は容易なものではないが地域の特色ある、しかもバランスの取れた発展のためには欠かせないものであることも明らかであろう。むしろ地域振興のための恰好の素材でもあるのである。

#### 6 まとめ

以上2つのマップの解説を通して北陸における伝統産業の特質と問題点を浮き彫りにした訳

であるが、前者のマップでは主に伝統産業の特長と考えられる面が全面に出されているのに対し後者では多分に疑問点、悲観論が出されているのが特徴である。

これは、それぞれの研究の目標が奈辺にあるかの違いといえばそれまでながら、後者の場合は直接の当事者がその業界の活性化をテーマとして意見を吐露した結果であるだけによりシビアな結果が出たものと考えられる。

先のシンポジウムの発言中で北出氏が指摘したが、今日まで同様のテーマであらゆる提案、勧告、指導がなされている訳であり、それでも、なおかつ改善を見ないということは、もはや実行あるのみなのであって、むしろ何が実行をばんでいるのかが今後は明らかにされるべきであろう。

特に九谷の場合に限ったことではないのであるが、矢ヶ崎孝雄氏（金沢大学教授）の『九谷焼』のなかに、わが国の輸出陶磁器がアメリカにおいて明治14年をピークに急減した事情と原因が当時の領事報告を引用して述べてあり紹介したい。第1は『その形状と模様と両つながら陳腐』第2は『わが雑貨商の競争して、自ら物品の価値を落とすこと』第3はフランス・イギリスが『わが陶磁器の製を学び、凶画の好処を模し、常に新型新様に注目し、年々流行物を製して、以てわが製品を圧倒する』ことであったとあるが、ただ精巧なだけで『旧套を脱せず』『需要に適せず、値は高く、形は古し』では『自ら売路を狭縮する一因』であったのだろうが、市場調査も十分にせず、ニーズに応えた新製品を出せない状況は八十数年経た今日なお変わっていないということが最大の問題といえるだろう。また近代的な経営形態を取ろうにも、低賃金でしかも先行きがあまり明るくない現状では優秀な人材そのものが集まらず、やるべきことが分かってもできない、という苦しい状態であることもまた事実である。

このように問題が明らかになったからといって解決できるとは限らないところが伝統産業の難しさであり、今後とも多面的な研究の必要性が痛感される。

